

共感から広がる輪

『「新しい野の学問」の時代へ：知識生産と社会実践をつなぐために』著：菅豊

(2013年 岩波書店)

石原冴理

単なる思い付きで、己の研究の利得として、被災地に赴いていないだろうか。この本は、民俗学の研究者である筆者が、専門家と地域の人々の関係性や、専門家の調査対象地とそこに住む人々への姿勢を問い、研究や学問としての知識生産や社会実践を、自らの行いを、今一度振り返り、問う。

印象的だったのが、「惨事便乗型」という言葉だ。大きな事件や災害を契機として、それを利用するかたちで自己の活動に使う。そしてそれが「好機」だということ。これは研究者や専門家だけの話にとどまらず、私たちにも言えることではないだろうか。これらの言葉は、今日のボランティア等において言われる問題の核心をついている。その様な単なる一時の調査やボランティアは迷惑にもなりうる。東日本大震災、そして熊本地震の復興がなされている現在、多くの企業や団体があらゆる政策をしている。個人的にもボランティアに参加する人も多い。だからこそ、流されてしまいがちな自分の行動や目的を、改めて考えるのによい機会となる一冊だ。

ではどのような姿勢で調査地やその地域の人々と関われば良いのか。研究者とその地域の人々、ボランティアする人と被災地、被災者。違うフィールドの人が交わる時、重要になるのは、「共感」だ。国の重要無形民俗文化財である牛の角突きが継承される、新潟県小千谷町東山地区。筆者の調査地が、新潟中越地震で被災する。地震前は東山地区調での調査を「仕事」と客観視していた筆者が、地震後は地域の人々と「共感」するようになる。自ら牛を買い、彼らと同じ立場でコミュニケーションを取る。しかし、よそ者であることは理解した上で、その地域の人々と「共感」し、近い関係を「継続」することが大切だと説く。

東山地区の強みは言うまでもなく、牛の角突きの文化があったことだろう。中越地震において、角突きを復活させることが、暮らしを立て直す励みになった。その土地の文化があると、地域の活性化、つながりが強くなる。みんなに共通のものと、それが共感を呼ぶ。角突きの文化が町や、人々の心の復興を支え、促すのだ。特に首都圏など、人と人とのつながりが希薄化している社会の中で、その土地の文化があり、継承されていることの意味は大きい。

本の後半では、情報技術の発展により、学問を職としない人々によっても多様に公共性を持って行われる新しい民俗学の在り方、すなわち「新しい野の学問」が提唱されている。違う立場にある人が協働していくことで新たな視点が生まれ、学問や社会が発展していく。新しい野の学問の時代、私たちは被災地に、問題に、他者にどう向き合うべきか。人を、物事を、知ろうと踏み出す一歩が、共感の輪を広げる一歩になるのではないだろうか。